胃がん検診（胃X線検査）のご案内

ピロリ菌感染が疑われた場合紹介状を発行いたします

～令和3年度から胃X線検査の読影判定区分が変わります～

ピロリ菌感染症とは？

ピロリ菌は胃に住み着く細菌。ピロリ菌感染は胃粘膜にダメージを与え、胃炎を引き起こし、胃がんの原因となります。ピロリ菌感染を放置すると、胃粘膜萎縮が進み胃がんになるリスクが上がり危険です。早期に除菌することで胃の粘膜は正常に保たれやすく、**除菌治療で胃がんになるリスクを30～40%下げることができる**と言われています。

なお、ピロリ菌の大きさは3～5ミクロン（1ミクロンは1㎜の1/1000）です。

胃がん検診
問診、胃X線検査

ピロリ菌除菌歴あり　　ピロリ菌除菌歴なし

異常なし

健康的な胃粘膜です。

今後も定期的に検診を受けましょう

放置可（精密検査不要）

良性の腫瘍や軽度胃粘膜萎縮はありますがすぐに治療の必要はありません。

ピロリ菌を除菌された方は胃がんのリスクは低下しますが、今後も継続的に検診を受け経過観察を続けましょう

新設 放置可（受診推奨）

紹介状あり

胃がんや他の病変の疑いはありませんが、ピロリ菌がいる可能性はあります。

医療機関で検査を受けピロリ菌陽性の場合除菌することをお勧めします

要精検

紹介状あり

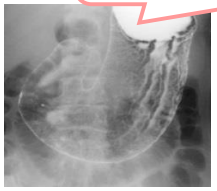
胃がんや他の病変の疑いがあります。

精密検査を受けましょう

精密検査

医療機関を受診。胃がんや他の病変があるか確かめます。

胃粘膜の状態からピロリ菌感染の有無が予測されます！



検査（胃内視鏡）
除菌治療（内服）

胃がんと診断

「異常なし」
または
「良性の病変」

参考資料：裏面参照

胃Ｘ線検査Ｑ＆Ａ

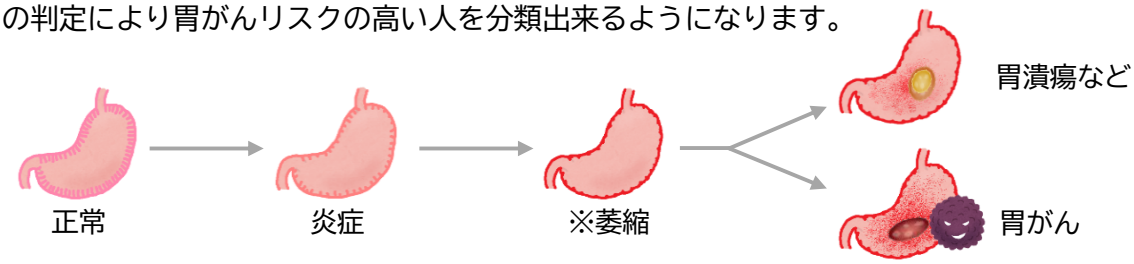
Ｑ１．どのように判定が変わるのですか？

Ａ これまで福岡県内で使用していた判定から、日本消化器がん検診学会が作成し提唱している「胃Ｘ線検診のための読影判定区分」に対応するために変わります。

今回の判定は、「胃がん発見効率の向上を目標とする胃Ｘ線読影の精度管理」と「胃Ｘ線検診を通じてピロリ菌感染対策に対応すること」を目的としています。

これまでの判定（病変の有無と良悪性の判定）に加え、Ｘ線画像から胃粘膜を観察し、慢性胃炎・萎縮の状態を診断して、ピロリ菌感染（疑い）を判別するようになります。

この判定により胃がんリスクの高い人を分類出来るようになります。



※正常な胃の粘膜はきれいなピンク色でひだに覆われています。しかし、ピロリ菌の感染によって炎症を起こし炎症が続くとひだがなくなり血管が透けて見えるほど粘膜も薄くなります。この様な状態を「萎縮」といいます。自覚症状はない人がほとんどです。

Ｑ２．変更されることのメリットは何ですか？

Ａ ピロリ菌に感染していると思われる方へ紹介状を発行いたします。ピロリ菌確認検査（内視鏡検査、血液検査、便検査、呼気検査など）で、ピロリ菌感染が確定した人に除菌していただくことで、胃がんになるリスクを下げることができます。

Ｑ３．胃がんリスク検査（ABC検診）とは違うのですか？

Ａ 胃がんリスク検査は、血液検査により胃がんリスク（胃の健康度）を分類することが目的ですが、ピロリ菌陰性の健康な胃と判定されている方の中には、胃がんや胃炎も紛れ込んでいる場合があります。そのような方を胃Ｘ線検査で拾い上げることが可能です。

Ｑ４．血液検査などでピロリ菌陰性でしたが、胃がん検診を受ける必要がありますか？

Ａ ピロリ菌陰性の方のなかには、除菌治療による既感染者、萎縮が進行したことによる自然排菌、抗生剤投与で偶然に除菌、現在感染しているが基準値に満たないなど胃がんリスクの高い方も含まれています。胃Ｘ線画像や胃内視鏡などの胃がん検診で、本当にピロリ菌に感染していない健康な胃かどうか胃粘膜を確認してもらうことが大切です。
なお、除菌によって胃がん発生リスクは低下しますが、胃粘膜の状態は完全に回復することはありません。また、ピロリ菌に感染していない人でも胃がんになる可能性がゼロではありません。

胃がんの早期発見・早期治療のため、ピロリ菌がいない人も除菌した人も定期的に検診を受けましょう！

参考資料：胃がんリスク層別化検診（ＡＢＣ検診）1版（2019.12.1）　認定ＮＰＯ法人日本胃がん予知・診断・治療研究機構　編

公益財団法人
ふくおか公衆衛生推進機構
Fukuoka Public Health Promotion Organization

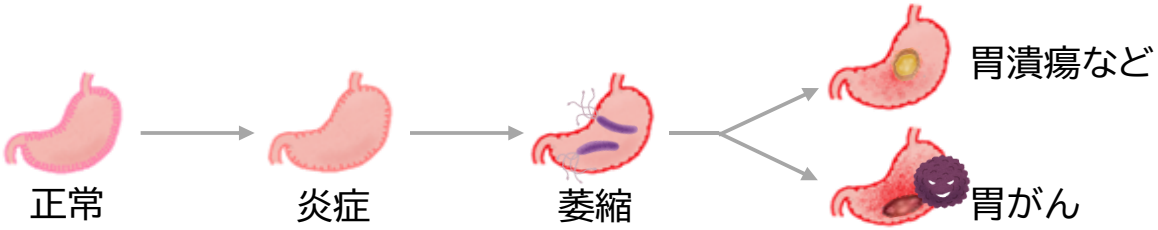
ピロリ菌感染症の疑いがある方へ

令和3年度よりピロリ菌感染症が疑われた場合、紹介状を発行しています

胃がん検診（胃X線検査）の結果からピロリ菌感染が疑われます。
まずはピロリ菌感染の有無を医療機関でお調べすることをお勧めします。
受診の際は、保険証と紹介状を必ずお持ちください。

ピロリ菌感染は胃がん発症の原因と言われています

ピロリ菌は胃の粘膜に感染する細菌です。
この菌に感染するとほとんどの方が自覚症状なく、胃炎の症状が続きます。
これを慢性胃炎と言い、長期にわたると胃粘膜萎縮が進行し、胃がんになるリスクが高くなります。また胃潰瘍など胃の病気にもなりやすくなります。



除菌すると胃がんリスクが30～40%低下します

ピロリ菌はお薬で除菌治療が可能です。
除菌治療を行うことで、胃がんリスクを30～40%低下させるだけでなく、
その他の胃の病気の予防効果もあります。
（除菌治療が出来ない場合があります。医療機関にご相談ください）

医療機関受診のながれ

1. 内視鏡検査、血液検査、便検査、呼気検査などでピロリ菌感染確認、
   胃の病気があるか診断を行います
2. ピロリ菌感染と診断された方は内服除菌治療を行います（抗生剤などを1週間服用します）
3. 除菌治療後は、時間をおいて除菌判定が行われます
4. 陰性になった後も胃がんリスクは低下しますがゼロではありません
   定期的に検診を受けましょう

ピロリ菌が確認されない場合も・・・

ピロリ菌感染が長期にわたると、**ピロリ菌が住めないほど胃粘膜萎縮が進行します。**
その場合、ピロリ菌検査で陰性となる可能性がありますが、胃がんになるリスクは高いです。
医療機関に相談し、毎年胃内視鏡検査などを受けることをお勧めします。

参考資料：胃がんリスク層別化検診（ＡＢＣ検診）1版（2019.12.1）　認定ＮＰＯ法人日本胃がん予知・診断・治療研究機構　編

公益財団法人
ふくおか公衆衛生推進機構
Fukuoka Public Health Promotion Organization